FDニュースレター

Faculty Development

北海道医療大学
Health Sciences University of Hokkaido

平成 26 年度号　No.15

CONTENTS

平成 26 年度 全学 FD 研修会開催報告　2

平成 26 年度 全学 FD 講演会開催報告　2

平成 26 年度 部・科・校 FD 活動報告

① 薬学部・薬学研究科　3

② 歯学部・歯学研究科　4

③ 看護福祉学部・看護福祉学研究科　4

④ 心理科学部・心理科学研究　5

⑤ リハビリテーション科学部・リハビリテーション科学研究科　6

⑥ 歯科衛生士専門学校　7

平成 26 年度 公開授業実施報告　8

授業アンケート改訂に向けた取り組み　8

GPA 導入に向けた取り組み　9

編 集 後 記　9

全学 FD 研修会を開催　新川詔夫学長による開会の挨拶（関連記事２ページ）

平成 26 年度 全学 FD 研修会開催報告
学生を中心とした教育を進めるために

平成２６年度全学 FD 研修会は計二回行われ、「学生を中心とした教育を進めるために」に関連したテーマで話題を提供し、参加者がグループに分かれて議論、その内容を発表しました。

平成 26 年４月５日

学生を中心とした教育を進めるために -学生の能動的学習を促す教育内容を目指して-

研修対象：新規採用された教職員　　開催場所：札幌サテライトキャンパス

内容：第１回全学 FD 研修会では、まず、本学の教育理念と目標について黒澤副学長による講和が行われました。この講和の中で、医療系総合大学として新医療人育成の北の拠点となることを目指し、本学の中長期的な行動計画も示されました。研修では、学生の能動的学習を促すために求められる具体的な行動目標について、教員間で話し合われました。

平成 26 年８月８日

学生を中心とした教育を進めるために –ジェネリックスキルテストを活用した本学の教育改革-

研修対象：教職員　　開催場所：当別キャンパス

内容：激変する現代社会で必要とされる人材には、専門知識だけではなく、社会・職業生活を上手く行う汎用的技能、すなわちジェネリックスキルが備わっていなければなりません。ジェネリックスキルを備えた人材育成に向けた最初の取り組みとして、薬学部と看護福祉学部の１年生を対象にジェネリックスキル診断テストを行いました。２回目となる全学 FD 研修会では、このテストの結果を踏まえ、学士教育でのジェネリックスキル育成のために本学求められる方策について議論されました。

この研修会では、ジェネリックスキルテスト開発に関わった株式会社リアセック 近藤　賢 氏から、本学学生のジェネリックスキルテストの結果を解説していただいた。さらに、長崎大学 大学教育イノベーションセンター助教 川越 明日香 氏を講師としてお招きし、長崎大学で行われている学士教育改革についてご紹介いただいた。

長崎大学 川越先生の講演

平成 26 年度 全学 FD 講演会開催報告

平成 26 年４月 16 日

ジェネリックスキルテスト説明会

講師：(株)リアセック 近藤 賢 氏　　開催場所：当別キャンパス

内容：ジェネリックスキルテストの導入に当たり、テスト開発担当者からその概要を説明していただいた。

平成 26 年９月３０日

医学教育の最近の動向　＜歯学部 FD 委員会との共催＞

講師：文部科学省高等教育局医学教育課　平子 哲夫 氏　　開催場所：当別キャンパス

内容：現在の医学教育を取り巻く環境についてお話いただいた。さらに、これら現状を踏まえて、近未来に求められる医療像と課題の提言していただいた。

平成 26 年１０月２８日、10 月 30 日

研究活動の不正行為防止と研究者倫理

講師：新川 詔夫 学長　　開催場所：当別キャンパス、あいの里キャンパス

内容：過去の研究活動における不正行為の実例を交えながら、科学研究における不正行為とはどのようなものかについてお話いただいた。また、不正行為の防止策や不正が発生した場合の対応策等、さらに不正行為の防止策についての本学の取組みについて説明していただいた。

平成 27 年１月１６日

学生の学修力を刺激する授業デザインの工夫と評価　＜看護福祉学部 FD 委員会との共催＞

講師：帝京大学高等教育開発センター長・教授　土持 ゲーリー 法一 氏　　開催場所：当別キャンパス

内容：“学修”を学生自らが深化させるような授業プランの工夫や評価法について、海外の研究結果を交えながら、帝京大学の取組みを紹介していただいた。また、GPA(Grade Point Average)の意義や活用法についてもお話いただいた。

平成 26 年度 部・科・校 FD 活動報告

① 薬学部･薬学研究科

薬学部FD委員会の今年度の活動方針として、1 回のFDセミナーとセミナー＆ワークショップをそれぞれ開催することを最初のFD委員会において確認した。

この方針に従い、10月には第 1 回薬学部教育セミナーとして、（株）リアセックの近藤賢氏、九州国際大学法学部の山本啓一教授を講師としてお招きし、「本学薬学部のPROGテスト結果について」と「ジェネリックスキルを育成する意義とその方法」と題してそれぞれ講演を頂いた。このセミナーからは、薬剤師資格取得という最終目標がある薬学教育では、まずリテラシーの育成が目標達成に対して大きな教育成果を得ることが出きること、またコンピテンシーの育成により社会のニーズに答えられる医療人の養成にも大きな成果を得ることが出きることが実感できた。

さらに、2月には「学生の視点を活かした薬学教育改善」をメインテーマに、「学生の望む良い授業とは」をサブテーマとして薬学部FDセミナー＆ワークショップを開催する予定である。ワークショップ前半では、各研究室からの学生参加者がグループに分かれて、授業方法や内容、授業を受ける環境などの普段受けている授業に関する様々な問題点、要望などについてプロダクトをまとめ、後半では教員も参加し、そのプロダクト発表に対して質疑応答、総合討論を行うという内容になっている。これは薬学部としても初めての学生参画型FDであり、学習の主役である学生が望む良い授業を知ることにより、それを活用した授業改善への取り組みを教員、学生が共に考えて行くことを目的としている。

この他、薬学部と薬学研究科の両FD委員会との共催により、第8回から第12回まで計５回の薬学教育・研究談話会を開催した。この談話会は、FD活動の一環として平成24年度11月から隔月開催しているものであり、将来の薬学を担う若手教員の研究や教育に対する取組み等を紹介し、教育・研究活動のさらなる活性化を図ることを目的としている。この談話会では、進行中あるいは過去の研究内容、関連分野の総説的内容、学会発表内容、教育的内容、教育・研究に関する話題提供など幅広い内容について、1人30分程度、2人の先生の発表が毎回行われている。教員はもとより、学生も傍聴可能であり、普段の授業からは聴くことのできない先生方の研究内容、考え方を知ることの出きる良い機会にもなっている。

また昨年から、退職される先生の最終講義を、薬学教育・研究談話会の特別開催として薬学部教務委員会との共催により開催している。これは、長年教育、研究に携わって来られた先生方のお話しを聴くことも、教員のFD活動にとって有益であるとの趣旨からである。今年度は3月2日（月）に３名の教授の最終講義が予定されている。

薬学研究科FD委員会独自のFD活動は今年度行っていないので、今後は、研究のさらなる活性化に繋がるようなFDセミナー、特別講演会などを開催して行きたい。

② 歯学部･歯学研究科

今年度の歯学部FD活動は、学部FD活動として①臨床実習（学外研修）、②臨床実習のあり方について、最強チームの作り方、④臨床実習（学外）報告会及び⑤歯学教育の方向性と他職種連携医療教育についてと題された研修会が行われた。これらの研修会では臨床教育の充実を中心に議論され、具体的な方策として学生が自ら処置するケースの増加を中心とする教育体制の整備が現在効率的に進められているとの報告が行われた。また、学外研修並びに他職種連携教育に関する研修会では、口腔内にとどまらず全身管理を見据えた歯科医療の必要性と重要性が明確にされ、地域に密着して他医療分野との連携をはかる歯科医師の将来像をある程度具現化できた。

研究科FD活動としては「研究マインドを持つ医療人育成を目指して」と題された研修会が行われ、歯科医療分野における研究者の育成に関して、学部教育の極めて早い段階での研究マインドを刺激する魅力的な取り組み（海外研究施設への派遣や研究報告会等）の重要性を再認識することができた。

全学FD研修会との協賛により「医学教育の最近の動向」と題された研修会も行われ、医療教育の現状をふまえた近未来の歯科医学と歯科医療に求められるニーズと課題が提言された。

これらの研修会を通して、今後の歯学部の課題は一層の臨床実習の充実と社会的な信頼を獲得するための魅力的（他職種連携等）、かつ効率的な教育プログラムを実現していくことであり、次年度以降はこれらを目標にしたFD活動を進めていく必要がある。

③ 看護福祉学部･看護福祉学研究科

今年度、看護福祉学部・看護福祉学研究科では、全学FD委員会との共催を含め３回のFD研修会を開催しました(表)。いずれも、テーマに関連する第一人者による講演であり、参加者にとっては、現在進めている教育活動への還元や研究活動の推進にあたり有意義な研修となりました。

「アクションリサーチ」は、看護学、福祉学領域に共通する研究法であり、変化や介入成果をもたらす方法論として注目されています。しかし、研究法としての特徴に魅力を感じ、いざ取り組もうとしても、複雑な手続きを有するプロセスゆえに“もどき”のような域を出ないというジレンマがあります。特に、研究のプロセスが看護実践のプロセスに類似しているため、なんとなく“できてしまう”という状況も生

じており、これがこの方法論の理解を阻む要因にもなっているように思います。そこで今回は、看護学領域において自身もアクションリサーチを実践し、大学院生にも指導している筒井先生を講師に迎えました。講演内容から、アクションリサーチの特徴、研究プロセス、推進する際の手続きなど概略を理解することができました。何より、アクションリサーチに対する

講師のパッションが伝わってくる講演でした。

「シミュレーション教育」研修は、OSCE を実施する上で事例の提示や目標達成に向けた運用を学びたいという要望から企画されました。講演では、単にシミュレーションという技法に走ることがないようにというメッセージが伝わり、理論編、ねらいと照合した運用法と教材の工夫など具体的に学ぶことができました。特に、看護学科では、客観的な評価方法に看護実践に特有の思考過程をどのように取り入れるのか試行錯誤を繰り返しながら取り組んでおり、今回の学びが次年度の準備に反映されるものと期待しています。

「授業デザインの工夫と評価」研修については、次年度から導入予定の GPA 制度との関連から、改めて、“学修”をめざした教授法と評価のあり方を学ぶために企画し、全学ＦＤ委員会との共催で開催しました。“学修力”を刺激する授業では、“学生がやってきたことがメインとなる”という趣旨から、反転授業やアクティブ・ラーニング効果の実証など紹介いただきました。実は、講演もそうですが、講演が始まる小一時間の裏話に大変触発されました。“山のように動かない組織”に変化を生み出すコツ、ＦＤ faculty development はその本質からＥＤ　education development　でありネーミングを間違ったのだという持論など、参加者の皆様にご紹介できなかったことが残念です。

最後に、ゲーリー先生の弁、“研修に参加した本人が少しでも何かを変えたいと思うこと自体が変化であり、FD なのだ”を借りれば、ＦＤ活動の成果は、教員ひとり一人が何を思い、何を変えたいと思うかであり、組織というより「個のありよう」なのだと確信を得たＦＤ活動でした。

2014 年 8 月 20 日	看護福祉学研究科ＦＤセミナー 臨床と一緒に研究しようー看護実践の場を効果的に変える手法　アクションリサーチ	筒井真優美 日本赤十字看護大学院
2014 年 11 月 15 日	看護福祉学部ＦＤセミナー 臨床実践力を育てるシミュレーション教育	阿部幸恵 東京医科歯科大学病院シミュレーションセンター
2015 年 1 月 16 日	看護福祉学部ＦＤセミナー 学生の学修力を刺激する授業デザインの工夫と評価	土持ゲーリー法一 帝京大学高等教育開発センター

④ 心理科学部･心理科学研究科

心理科学部言語聴覚療法学科と臨床心理学科の FD 活動の議論の場は多岐にわたる。もっとも濃密な議論が行われる場所は両学科会議の席上であるが、臨床教育に関わる教員のみが集まって臨床指導に関する協議を行う場も用意されている（臨床心理学科）。このほかにも、両学科が共同して研究や教育について議論する会として、臨床心理・言語聴覚セミナーという談論風発の機会も用意されている。これは平成 14

年に心理科学部が設立された初期からあり、本学部でもっとも長い歴史を持つ研究会の１つである。平成26年10月7日に、この臨床心理・言語聴覚セミナーの場を借りて、「北海道医療大学心理科学部FDセミナー」を開催した。講師は心理科学部臨床心理学科所属の金澤潤一郎専任講師にお願いした。演題は『発達障がい傾向のある学生との関わり方』である。金澤先生は昨今注目が集まっている大学生のADHDはじめ、大人の発達障がいに対するサポート方法を研究している臨床心理学者であり、全国の大学から講演や研修会講師の引き合いがたくさんある人気講師である。

当日の研修会はほぼ以下のような内容であった。

18歳人口の減少や大学進学率の上昇、さらに平成28年4月から施行される「障害者差別解消法」の影響もあり、大学では発達障がい傾向をもつ学生への対応がより一層大きな課題となった。とくに診断を受けている学生に対しては社会的障壁を解消するための合理的配慮を行う必要があるが、多くの若者の場合、未診断であるか診断に至るほどではない程度の発達障がい傾向をもつことで学業面や生活面で困難さを抱え、高等学年での外部実習、国家試験対策、就職後に問題が顕在化している。先進的な大学ではすでに学生支援センターなどが発達障がい傾向をもつ学生の相談窓口として機能しており、修学、キャリア、メンタルの問題として整理・分類して積極的に対応している。この点、本学部は遅れをとっている。

発達障がい傾向をもつ学生は、セルフモニタリングや相談することが苦手である。そのため、相談に来やすい状況を作ること（例えば、授業前後に困り感のありそうな学生に声をかける、エレベーターや廊下で声をかける）で相談しやすくなる。実際、このような小さな心がけと声かけから退学を未然に防ぐことに繋がる例も多い。従来型の受け身の相談体制はほとんど役に立たない。また、教職員の相談態度としては、「理解しがたい、思いがけない学生の行動」の心情や背景を謙虚に知ろうとする姿勢が望ましい。

今後の課題として、担任制度の効用と限界の整理、教職員間の情報や価値の共有、未診断学生（気になる学生）への対応を誰が・どうやって・どこまで行うのか、臨床家としてではなく教職員としての対応の望ましいあり方とは何か、等について率直な意見交換が行われた。本学にはこの問題に関する高度な専門家や地域で信頼を集めている指導者がすでにたくさんいるなど恵まれた人的資源を有した大学の１つであり、早急に全学統一的な対策を講じていくべきだろう。

⑤ リハビリテーション科学部･リハビリテーション科学研究科

リハビリテーション科学部では、3回のFD研修会を開催いたしました。

第1回目は、平成26年8月4日（月）に、東進ハイスクール・大学事業部長の竹岸章氏をお迎えし、「最近の学生の基礎学力低下とその対策」と題して学部FD研修会を開催しました。当日は、リハビリテーション科学部教員19名、看護福祉学部3名の教員が参加しました。本研修会は、①高校生の学力状況②高校における評定のつけ方の現状③小学校～大学までのノートテーキングの現状④「生きる力を育む」教育がもたらしたもの⑤学力低下への対応策を約1時間説明していただいた後に、３０分にわたって質疑応答が行われました。

今回の講演では、既読スルーの問題によって中高生が十分な勉強時間を確保できないことや、小・中・高等学校のノートテーキング指導が大学生の口述筆記能力の低下に影響しているなど、教育現場における様々な問題の具体的背景が解説されました。大学入学前までの教育を理解し、今後の大学教育を考える上で、大変有意義な研修会となりました。

第2回目は、平成26年10月2日(木)に、歯学部・大学教育開発センター礒部太一講師をお迎えし、「研究倫理を学ぶ」と題しまして、学部・研究科合同FD研修会を開催しました。当日は、リハビリテーショ

ン科学部教員 18 名、院生 1 名が参加しました。

前半では、研究者の不祥事事件を踏まえ、研究者としての基本的な姿勢や責任、生命倫理を主題に、その意義や歴史的背景、実際に生じてきた問題などが紹介され、“研究者が持つ社会的影響力の大きさ”が語られました。後半では、倫理委員会による倫理審査での総合的な評価の視点の説明がありました。さらに、具体的な質問に対してグループワークを実施し、講師と参加者との熱心なやり取りを行いました。その場で解決できなかった質問については、後日礒部先生よりメールによる回答がなされ、“後味がスッキリとした”研修会となりました。

第 3 回目は、平成 26 年 12 月 11 日(木)に、リハビリテーション科学部の吉田晋教授と本家寿洋教授による「ファシリテーションとは何かを学ぶ」と題しまして、学部研修会を開催しました。当日は、リハビリテーション科学部教員 15 名が参加しました。このテーマは、来年度開講する多職種連携論での演習課題において、教員がファシリテートするための「ファシリテーション基礎編」という位置づけであり、両講師が参加した、日本ファシリテーション協会が開催している「ファシリテーション基礎講座」の内容を伝達いたしました。

内容は、ファシリテーションにおける 4 つのスキルである、①場のデザインのスキル②対人関係のスキル③構造化のスキル④合意形成のスキルを説明し、グループワークでの演習も行いました。特に場のデザインのスキルと合意形成のスキルは、会議でも使用できること、ファシリテートする人は中立的な立場で進めることが必要であることを実感できる研修会でした。

⑥ 大学教育開発センター

大学教育開発センターの平成26年度ＦＤ活動として、平成27年3月11日（水）10時30分から全学教育を担当する教員20名が参加し、全学教育の内容や方法等に関する情報交換、意見交換を目的とする「全学教育懇談会」を開催しました。

ここ数年来、新任の先生が多く赴任していることやこれまで全学教育を支えて来られた多くの先生が定年退職などで退かれることとなり、教養部時代から脈々として受け継がれてきた全学教育の今後の方向性を探ることと、最近の教育方法に関するめまぐるしい動きを鑑みての開催となりました。また、これまで個人レベルもしくは担当分野内での具体的な事例に基づいた細かな対策や、そのための情報・意見交換は頻繁に行われて来ましたが、全学教育全体を対象とした標記の開催はなく、遅ればせながら医療系かつ国家試験対応などを背景とした、本学特有の全学教育を構築する上で必要不可欠な開催であることを多くの先生よりご指摘をいただいての運びとなりました。

本年度は、分野主任の教員を中心にご意見を調整した結果、比較的時間に余裕が有る時期に開催し、しかも初めての取り組みでもあり、消化不良にならないためにも「懇談会」形式により、この時期の開催となりました。

話題提供者として、最初に今年度から始まった個体差健康科学・多職種連携入門のコーディネーターをされた花渕馨也教授による「個体差健康科学・多職種連携入門を知っていますか？」、続いて「教養教育・一般教育・専門基礎教育としての全学教育」というタイトルで、これまで手厚い教育指導を展開し、豊かな教育経験をお持ちの薄井明准教授によるプレゼンテーションを行い、それぞれ20分程度の発表後、10分間の質疑応答が行いました。

花渕教授からは、これまでの個体差健康科学実施に関する経緯や受講の様子が紹介されました。学部混成クラスによる授業展開のご苦労や評価の難しさおよびグループワークの内容が重複するなど、今後に向

けての改善点などが披露されました。これに対し、卒業生などを中心とした現場で活躍している人材の活用に関する指摘などがあり、活発な意見交換が行われました。

薄井准教授からは、始めに全学教育に関する用語や概念に関する概要説明が行われ、続いて主に社会学における講義内容が披露されました。看護福祉学部における社会学の定期試験不合格者に対する対応が印象的で、特に社会福祉士の国家試験科目でもあることから不合格者全員に対して１人30分の面談を実施しているとの報告でありました。臨床福祉学科では、約半数の学生が対象者となっており、低学力学生に対する個別指導の意味合いもあるということで、他の教科との積極的な情報交換の必要性が確認された内容でした。

最後に全体での意見交換が行われ、懇談内容が教員会にも反映されるのではという感想や授業公開への発展性に関する意見が出されました。また、ディスカッションの時間が短い、年に2回ぐらいの開催があっても良い、発表者は1人にして時間配分を考慮した方が良いなどという意見がありました。今後は、外部の研修会に関する参加報告も加えるなど多くのご意見いただきながら、充実した内容にしたいと考えています。

⑦ 歯科衛生士専門学校

今年度実施された全学 FD 研修のテーマは「学生を中心とした教育をすすめるために」ということでジェネリックスキルをどのように活用できるのか、その有効性と課題をグループで検討されました。北海道医療大学には様々な専門性を持っている先生達がおられますので、活発な意見交換が行われ、議論の幅がどんどん広がっていく様子をみていて参加している私にも大変刺激になるものでした。FD 講演会「医学教育の最近の動向」では医学教育を取巻く環境や歯学、薬学、看護教育についての最近の動向の話を頂き把握することができたと思います。

歯科衛生士専門学校には独自の活動はありませんので、主に全学で実施される FD 研修会への参加をしています。その他には北海道歯科衛生士養成機関が主催の研修会が年 2 回あります。本学での FD 研修会に参加することで、大学教育における教育方法や内容の変化、学生対応などの最新情報を取り入れることができます。歯科衛生士教育の動向、カリキュラムや教授方法については全国・全道で行われる研修会で情報を得ています。

歯科衛生士専門学校の今後の課題としては、いままで実施していなかった授業アンケートを次年度からの実施を考えています。これは歯科衛生士養成の中心となる全国歯科衛生士教育協議会でも設置母体に関わらず自己点検評価、授業計画、授業アンケートなどの実施を促す方向に変化しつつあるためです。平成 24 年には歯科衛生学教育コア・カリキュラムが作成され全国に配布されました。これは、歯科保健医療に関する国民のニーズが多様化・拡大する中で、良質な歯科保健医療サービスを提供していくためには歯科衛生士を充足し、資質の向上をはかることを重要と考え、歯科衛生士養成校における歯科衛生士教育の質をより高め、一定水準の質を担保すると同時に教育内容を再編成し多様化を図ることを目的としています。このような歯科衛生士教育の変化に乗り遅れることにないよう、活動を続けていきたいと思います。

平成 26 年度 授業公開実施報告

教員の更なる授業改善と教育力向上を目的とし、教員が他教員の授業に参観する授業公開を、全学 FD 委員会が主導となり、平成２４年度から行っています。平成２６年度の実績は、以下のようになっております。

表．平成 26 年度実施公開授業（平成 27 年３月２０日現在）

	公開科目数	のべ講義コマ数	参観者実数
前期授業	24科目	61 コマ	37 名
後期授業	６ 科目	８ コマ	６ 名

授業アンケート改訂に向けた取り組み

授業アンケートの設問について、授業の改善により密接な項目に、また学生が回答しやすいように改訂を行いました。新授業アンケートを以下の表に示します。

表．新授業アンケート

自己評価

1	この授業に費やした自己学習時間は週に、(1)1時間未満、(2)1時間以上～3時間未満、(3)3時間以上
2	自分はこの授業に意欲的に取り組んだ。
3	この授業を受ける為に、シラバスを有効に活用した。
4	シラバスで求める授業の履修目的を達成できた。
5	授業により、新しい知識、考え方、技能を習得でき、さらに勉強したくなった。

授業について

1	授業はシラバスにそって体系的に行われていた。
2	教員の熱意が伝わった。
3	授業での声の聞きやすさ、板書やスライドの文字等の見やすさは適切だった。
4	授業は、理解しやすいよう工夫され、わかりやすく進められた。
5	テキスト、プリント、スライド、IT 機器などを適切に利用し、理解に役立った。
6	教員は、学生の質問(授業時間外を含む)・発言等に適切に対応した。
7	授業は適切な速さで行われた。
8	適切に授業外学習(レポート、宿題、自習)などを課した。
9	学んだ分野や関連する分野への関心が広がる授業であった。
10	価値のある授業であった。(総合的に良い授業であった。)
11	教員の自由設問1
12	教員の自由設問2

GPA 導入に向けた取り組み

GPA(Grade Point Average)制度は、「厳格な成績評価」や「単位の実質化」による「大学教育の質の保証」の観点から、文部科学省が教育改善の方策として活用を推奨し、近年多くの大学において本制度の導入が進められています。

本学においても、平成２７年度の１年生から GPA 制度を運用することとなり、全学 FD 委員会においても①本学奨学制度等における選定、②学修指導、③授業科目間の成績評価の平準化 を基本方針とすることなどについて確認した。

編集後記

各方面の方々のご協力により、無事 FD ニュースレター第１５号を発刊できる運びとなりましたこと、お礼申し上げます。今号では、北海道医療大学で行われました平成２６年度 FD 活動を中心に、ご紹介いたしました。このニュースレターを通して、本学の魅力や可能性を広く社会に認知されることを願ってやみません。

発 行 日　2015年3月31日
発 行 元　北海道医療大学全学FD委員会
編集委員　黒澤 隆夫(委員長)、石井 久淑、岡橋 智恵、笠原 晴生、鎌田 樹寛、国永 史朗、志渡 晃一、〇下村敦司、千葉 逸郎、〇冨家 直明、平 典子、平藤 雅彦、本家 寿洋、森田 勲、和田 啓爾(〇発行担当)